

☆四旬節第3主日(3月3日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (出エジプト記 20章 1-17節)

その日、神はこれらすべての言葉を告げられた。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隸の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。

あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。

あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかない。

安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隸も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。

あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。隣人に関して偽証してはならない。隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隸、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」

第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙Ⅰ 1章 22-25節）

皆さん、ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

福音朗読（ヨハネによる福音書 2章 13-25節）

ユダヤ人の過越祭が近づいたので、イエスはエルサレムへ上って行かれた。そして、神殿の境内で牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たちを御覧になった。イエスは縄で鞭(むち)を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、鳩を売る者たちに言われた。「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」弟子たちは、「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い出した。

ユダヤ人たちはイエスに、「あなたは、こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せるつもりか」と言った。イエスは答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」それでユダヤ人たちは、「この神殿は建てるのに四十六年もかかったのに、あなたは三日で建て直すのか」と言った。イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。

イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた。イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、人間についてだれからも証ししてもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

三月に入りました。春の暖かさはまだですが、辛抱強く待ちましょう。桜の開花予想は3月21日だそうです。御復活祭ごろは桜が満開でしょうね。楽しみです。

第一朗読（出エジプト記 20章 1-17節）

主なる神がモーセに律法の基本である「十戒」を告げられたことが述べられています。その中で語られている神の姿は、「あなたの神、あなたをエジプトから導き出した神」、「熱情の唯一の神」、「幾千代にも及ぶ慈しみを与える神」だということです。モーセがいた時代には多くの神々が存在し、人々を恐れさせ、人々を奴隷として貢がせる、愛のない神々であったのです。現代にあっても私たちの周りには多くの偶像、私たちを奴隷にしてしまう偶像が身近にあるのです。拝金主義、名誉欲、情報依存、IT、AI依存など。これらの奴隷状態から救い出してくださるのは「私たちの神」なのです。

第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙Ⅰ 1章 22-25節）

「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」とパウロは言います。ですから「世の人々には愚かなものとみられる十字架」こそが、イエスを信じる者にとって絶対的に信じるに値するものなのです。これまでの多くの殉教者、聖人たちは十字架の愚かさを他の何よりも大事にし、命さえ捨てたのです。十字架のイエスは弱さの印ではなく、神の強さであり、それは人間の強さの到底及ばない愛の神の深さ、憐み深さ、慈しみ深さの印なのです。

福音朗読（ヨハネによる福音書 2章 13-25節）

イエスはエルサレム神殿の境内で行われていた商売人たちの行動をいつになく激しくとがめられます。何もそこまでしなくてもと思うような行動です。当時のエルサレム神殿は父なる神に生贄を捧げ、祈りを捧げる場所でした。

イエスにはそのような場所が神に祈りを捧げる場所には到底そぐわない商売人たちの行為、神をないがしろにする行為と映ったのだと思います。その怒りの激しさは弟子たちもびっくりするほどでした。なぜでしょうか。考えられるのはイエスと父なる神は一体であるし、自分をこの世に遣わされた父なる神への不敬と考えたからではないかということです。イエスは別のところで、自分に対するいわば不敬は許されるが、聖霊に対する不敬は許されないと言っています。父・子・聖霊は別々の位格でありながら唯一の神として一体であるという三位一体においてイエスは父なる神、聖霊なる神に対する格別の愛を持っておられることを主張なさったのではないかと思います。そこで父なる神の神殿をないがしろにしていた人たちに怒りを爆発させたのではないかと思うのです。私たちにとって目を見張るほどの父なる神への愛情表現だと思います。見習いたいと思います。



イエス・キリストの足跡であるタボル山の教会(2018年)

P.S.

来週日曜日(3月10日)には阿部神父様が来られて、ゆるしの秘跡が受けられます。ご希望の方は心の糾明をして準備いたしましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光